

信綱一首・7

おのが世に見る人なくも後の世に
誤^{あやまり}ただすよき師を待たむ

卯の花余話 伊藤 智

五月のゴールデン・ウィークのころ、石薬師地区内を歩いているとあちこちの庭先や土手などで、あの可憐でつつまじげな白い花をよく見かけることがあります。
しかし、このような風景と出会うようになったのも、つい最近のことで昭和六十三年、「明るい町づくり推進協議会」が中心となり『卯の花の里』づくりに取り組むようになってからのことです。

石薬師は、ご承知のように東海道の宿場町で、昔から植木づくりが盛んな地域であり、とりわけサツキの生産高は全国一を誇っております。

卯の花は一般的な花木ですが、植木農家ではほとんど栽培されておらず、前記の協議会等が中心となって、毎年卯の花の咲き終る六月ごろ、さし木をして苗木の確保に努めているようです。

このように、今では石薬師町のどこでも見受けられるようになったこの花も、記念館とのかかわりはそれほど古いものではなく、生家が移築された昭和四十五年ごろ、市内

第五歌集『鶯』の正述心緒から。校本万葉集を空気の實在に響えて讀えられた廣岡義隆先生が、しかもなお「校本万葉集も万能ではない」ことを若い学究の営為を通じて指摘された。それを、信綱みずからが予見したような一首。かくしてこそ、はじめてこの労作の命は、永遠」と言い得るのであろうか。(村田邦夫)


神戸町在任の某写真館主が一株を生家の庭に移し植えたのが始まりと聞いております。

平成二年八月、心の花全国大会が当市で開催された折参加者全員に記念として卯の花の苗木をお持ち帰りいただきました。昨今この時季には全国のあちこちで可愛い花を咲かせているものと、ひそかに誇らしく思っております。

今春の人事異動により職場が変わりましたが、二年余の在任中に読んだ『万葉集』の中で、卯の花を詠んだ歌は二十四首ほどあるということですが、そのうちの一首を選んでペンをおきましよう。

巻十 五月山卯の花月夜ほととぎす聞けども飽かず
また鳴かぬかも 作者未詳・一九五三

（前佐佐木信綱記念館勤務）
あとがき 昨年開催の七周年記念特別展示「佐佐木信綱と万葉集」展の際、記念講演をいただいた村田・廣岡両先生の講話のうち、今回は廣岡先生の分を掲載いたしました。紙面の都合で要旨のみになったことと大変おくれましたこととを併せてお詫び申し上げます。(辻)

	
目次	『校本万葉集』について 資料館所蔵『校本万葉集』の想い出 信綱一首(七) 卯の花余話 あとがき
廣岡 義隆	辻 正 村田 邦夫 伊藤 智
・鈴鹿市教育委員会文化財保護課 (TEL・〇五九三・八二・九〇三) 千五二一 鈴鹿市神戸九一―一―一五	・佐佐木信綱資料館 (TEL・〇五九三・七四・三二四〇) 千五二一 鈴鹿市石薬師町一七〇七

『校本万葉集』について

廣岡 義隆

『校本万葉集』(一九二五年〔大正14〕刊行)は、『万葉集』の原本が見つかからないものですから、後世の写本を総合して原本の姿に迫ろうとしたものです。その出発点は、『万葉集』の定本(本文の決定版)の作成という文部省からの依頼にありました。『校本万葉集』の刊行後、一九四〇年(昭和15)から一九四八年(昭23)にかけて、信綱氏と武田祐吉氏の両氏によって『定本万葉集』が刊行されています(岩波書店刊)。

『校本万葉集』は、貴重な写本の一文字一文字に当たっての作業ですから並大抵のことではありません。佐佐木信綱氏を中心とした「営々たる共同作業」(林大氏の言)の結果完成したものです。そのメンバーは信綱氏と橋本進吉氏・千田憲氏・武田祐吉氏・久松潜一氏で、とりわけ信綱氏と武田祐吉氏が中心となりました。久松潜一氏は諸注釈の諸説付記を専ら担当されました。空気はいつも吸い続けてい

ますが、それを一々意識していません。『校本万葉集』も万葉学の上でそういう空気のような存在となっています。

信綱氏の生涯の仕事について、佐佐木幸綱氏は次の様に書いています。信綱氏の成果をみごとに言い得た発言です。

信綱が研究生活の根本に見ていただろうところのものは、人間の弱さ、小ささの認識であったと私は思う。一人の人間が一生のうちになしうるところはごく小さい。その点を謙虚に認識すべきだ、というのが、信綱の基本的な考えだったと私は思う。だから、共同作業を熱心にプロデュースし、研究者の底辺を広げるための啓蒙活動に力を用い、次代へ托すための基礎作業を重視し、研究史に熱い目を注いだのであった。信綱の仕事は私はその理解している。

(『国文学 解釈と鑑賞』51―2、一九八六年二月)
『校本万葉集』は、東京大学の木村正辞氏の文献学を正統に受け継ぎ発展させた信綱氏の中心的な仕事と位置付けてよい大事業でありました。この『校本』が刊行されていなければ、万葉学の基本は随分遅れていることと思えます。信綱氏自身が「ここに、永久に萬葉學の基礎を築き成し得

たことを深く喜んでる。」（「かへりみて―校本萬葉集について」『佐佐木信綱文集』所収）と言っておられます。ここで、『校本萬葉集』も万能ではないということをおきましよう。

一つは『校本萬葉集』にも誤りがあることです。誤りを見付ける手段は出来る限り複製本を見ながら使用することです。この複製本を横に置きながらの活用は諸本間の誤写過程の解明など他の効用もあります。

次に、稀なケースではありますが、版による異同があります。平成四年度のこと、大学での演習中に学生の池田幸

恵氏（現大阪大学大学院生）が発見しました。『萬葉集』

卷十六の三八二六番歌の第五句「宇毛」の箇所です。底本である寛永版本では「宇毛」となっているのですが、

「毛」となっているのですが、

昭和六年の洋装普及版ではなぜか「宇毛」（B）となっています。この「宇毛」では訓の校異と合いません。どうい経緯でこうなってしまったのかわかりませんが、何らかの錯誤があったのでしょうか。新増補版が出された時に刊行された『校本萬葉集（八）』（C）は原版の和装本（A）によっていて誤りはありませんし、新増補の活字版も「宇毛」（D）と寛永版本の通りになっています。最後に、巻一の二一番号を例に原本の歌形を復元してみ

ましよう。『校本萬葉集』の本文校異を元に、諸本の性格等を考慮して、本文を形式的に復元しますと次のようになります。

紫草能爾保敵類妹乎爾苦久有者人媼故爾吾戀目八方

この中三ヶ所に見える「爾」の字は、当時一般的には、同字ながらより簡略な「尔」の字形が多く使われています。現にこの歌においても多くの古写本で「尔」の字形が使われています。よって「爾」の字は「尔」の字になおします。次に第二句中の「敵」の字です。この「敵」の字は、ここでは「敵」の字として使用されているのではなく、「敵」の字（万葉仮名の「敵」）の異体字として使われているわけです。よってここは「敵」となおした方がよいわけですね。この様な過程を経て二一番号は、

紫草能爾保敵類妹乎尔苦久有者人媼故尔吾戀目八方と修訂復元された本文を得ることが出来ます。

この二一番号はごく単純に復元出来るケースですが、複雑なものも多くあります。又、復元困難なものもあります。

その訓は後世のもので、万葉原本にはなかったものですが、『校本萬葉集』によって、古点（天曆年間頃の訓）・次点（古点と新点の間の諸家の訓）・新点（中世の仙覚による訓）を復元しておきましょう。古点は、平仮名表記であったのか片仮名表記であったのか、判然としていません。今は古写本古点に一般的な平仮名表記で示しておきます。

〔古点〕むらさききのはへるいもかにくゝあらはひと

インタビューを降り、先ず鎌倉の佐々木家を訪れ、南京遺文・南京遺芳をはじめ信綱先生編著の書籍類、故文綱氏の少年時代の日記類など、ひさ夫人の御好意による寄贈を受けたのでした。

そこで私どもを待ち受けておられた村田先生のご案内で、前々からお話のあった校本万葉集和装本五帙二五冊と西本願寺本萬葉集複製一箱二一冊（解説一冊）等のご寄贈を受領するため西郷邸を訪れたのでした。

氏は原三溪翁の令孫で『塔』の歌人西郷春子夫人の令息。原家三代に及ぶ信綱先生とのご縁は、自伝三部作の随所に語られています。ここでは四一歳の明治四五年、最後の東京帝大卒業式に行幸となった天皇の御前で万葉集古鈔本を講じた時、三溪翁愛蔵の藍紙本万葉集を加えられたことを記すにとどめたいと思います。

この夜、健一郎氏は淡々と「お役に立てば嬉しい」と言われましたが、俊子夫人は少し名残り惜しそうちに「折々の客間の床を、西本願寺本の四季の歌で飾りました」と語られ、冷えきった吾々に、熱い葛湯を馳走してくださいました。この二著は、文化勲章・真淵自筆門人録・チェンパレン自筆原稿・英訳万葉集和文原稿等と共に当資料館のいわば「館宝」的貴重資料として常時展示し、好学の人々に大きい感銘を与えています。

その西郷健一郎氏も、今春八〇歳で遠逝されました。（鈴鹿市教育委員会 文化財保護課）

つまゆゑにわかこひめやも
〔次点〕第二句―ニホヘルイモヲ（次点1）
第三句―ニクカラハ（次点2）
第四句―ヒトツマユヘニ（次点3…但伝訛）
第五句―ワカコヒメヤハ（次点4）
〔新点〕初句―アキハキノ
以上、昨年八月一日の話をもとにまとめました。その後、原本を考える上で重要な位置にある『廣瀬本萬葉集』の存在が判明しました（木下正俊氏・神堀忍氏「廣瀬本萬葉集概要」『文学』季刊512、一九九四年四月）。この影印複製が『校本萬葉集』の別冊として本年九月から配本されます（岩波書店）。『校本萬葉集』は今も成長発展して、その命は永遠と申せましよう。

（94・8・8記）
（三重大学 人文学部）

資料館所蔵『校本万葉集』の思い出

辻 正

昭和六二年一〇月一日、私たち三人が横浜市本牧にある三溪園に近い西郷健一郎氏の隣花苑に着いたのは冷たい秋雨の降る夕暮れのことでした。

教育長の公用車を田中義一氏が運転され、当時教育委員会におられた西村喜久男氏（現資産税課長）に従って市役所を出発したのが早朝七時、名神高速から東名高速の横浜